

素の人へ

心に沁みるような音楽を聴いたときには、この演奏者がこうして奏でてくれてありがたいと思う。舞台に接しては演技に没頭して、ああよくぞあなたが役者でいてくださいましたと拝むような気持ちで劇場を去る。

このような思いで「絵をつくるひと」を見ることになった、アンジュとの出会いは思えば常に陽光の恵みの中にあっただように思う。

ヴェニスの海辺の光の中で会ったぼうやは、やがて少年になり、青年となった。東京に来て住んだ根津の部屋でも、窓から入るやわらかい光線の中で客人に背をむけてひたすら描いていたアンジュ。母親のりつえさんが大切な友だちなのでアンジュも私にはとても身近に感じられる存在だ。

だが、彼の方はどうだろう。自分の世界をしっかりと抱いていて、少し外の音が聞こえ難いので他者との会話はあまりしていないから、私が身近に感じるのは彼の描く世界で、それを読み取ろうと私は試みている。

透明度の高い青がさまざまに現れる平面のシリーズが私は好きなのだが、自然の風景でもあり心象風景でもあるイメージがたんと定着している。なんのためらいもなくサーっと埋められる（のであろう）画面はどのように始められるのか。私はりつえさんに聞いてみた。

「行為から描きはじめている」というその答えには毎日制作を見守る母でなければ言えない観察の奥行きがある。キャンバスの前に立つ、そして、身体の振りの感じから表現が始まっていると知る。絵は始まっているのだ。描き順なし。現れたものを拾い受けるかのようで、端から描いても全体像が定着していく。全く怖がっていない、とりつえさんは加えた。

だから、といえるだろうか描きあげるのが早い。

そして生まれ出る画像には、ゆったりとした空気が漂う。

私の言葉ではその空気は品、である。

素のままの人間というひとがいるとしたらそれはアンジュだ。余計なものがまるで入っていない精神。

花に出会って生け始めるひと。または雲水。
芸術世界のことなど何も知ることなく、画布に向かう。
アンジュ、よくぞアーティストになってくれました。

小池一子
2014年7月

初出 三嶋安住『青い水晶』BOOK PEAK, 2014年